

2009 年度 基礎乗船実習テキスト

練習船おしょろ丸第 204 次 基礎乗船実習航海



2009 年 9 月 2 日～9 月 14 日

北海道大学 水産学部
基礎乗船実習WG

目 次

1. 乗船実習の目的	1
2. 航海日程	1
3. 集合場所・時間	3
4. 学生携行品	3
5. 乗船中の注意事項	4
6. 実習内容	4
6.1 気象・海象観測実習、目視観測実習	4
6.2 CTD 等による海洋観測実習	9
6.3 ロープワーク	11
6.4 プランクトン採取・顕微鏡観察実習	13
6.5 イカ釣り実習	14
6.6 イカの鮮度調査実習	17
7. レポートの作成と提出	18
詳細スケジュール	19
教員・乗組員	21
船内マップ	23

1. 乗船実習の目的

【概要】

水産学附属練習船「おしょろ丸」に乗船し、水産学の対象となる海というフィールドを実体験する。また、これと同時に、フィールドに出るために必要な船の航法や海図等を通じた地学の理解、またイカなどの生物採取、イルカ・海鳥などの観測等により生きた海洋生物に接し、海洋生物の生息を理解する。全体にグループ学習を通して船という空間において規則正しい共同生活を体験する。

この科目は、必修の専門科目である他、教職の「教科の科目」における「地学実験」にもなっている。なお、障がい等によって履修が困難な学生には、別途、沿岸実習の課題を与えるので申し出ること

【学習目的】

1. 北海道大学の理念である開拓者精神(フロンティアスピリッツ)の養成。
2. 水産学のベースとなるフィールド、およびその地理学的な特徴と環境を容易にイメージできる。
3. フィールドに生息する海洋生物を調査する方法を理解する。

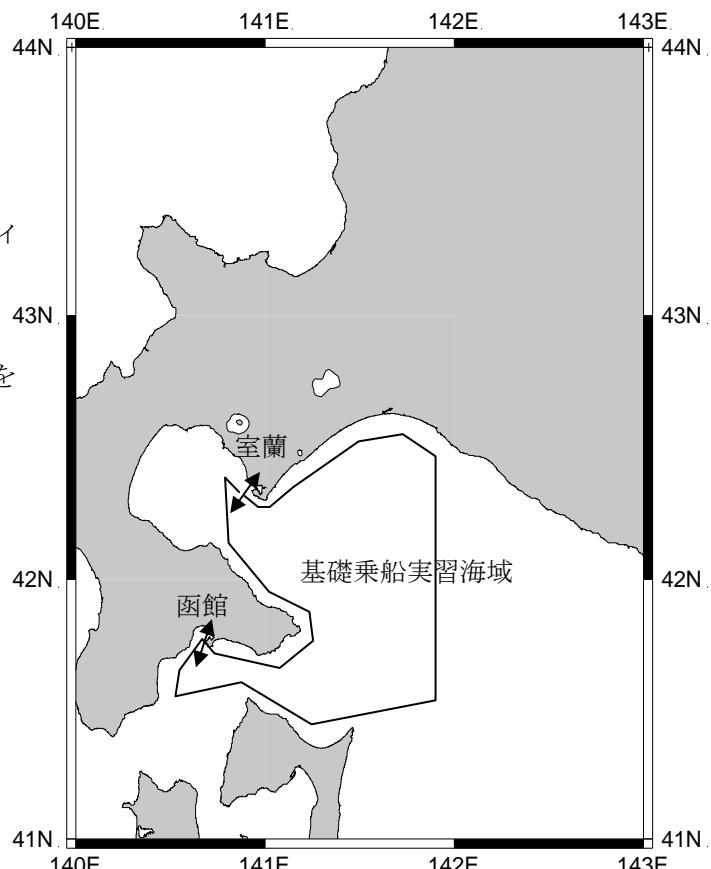
【到達目標】

1. 水産学の対象となる海を実体験し理解する。
2. フィールド位置の表し方、気象・海象・海水の特徴を表現できる。
3. 海洋生物とその生息環境を理解し学習する。
4. 海産物の鮮度について学習する。
5. 船内でコミュニケーションがとれ、円滑な船内生活を過ごすことができる。

2. 航海日程

室蘭港を出港し噴火湾を実習海域とし、室蘭港に戻る3泊4日の短期の航海を行う。練習船の学生

定員が最大 60 人なので、クラス毎に4回に分けて実施する。各クラスは 8 直(7 名程度)の班に分かれ、実習を行う。なお、天候・海象などの状況に応じて、随時実習項目や寄港地を変更することがある



寄港地	入 港	出 港	備 考
室 蘭	09月 2 日(水)	09月 2 日(水)	46組学生乗船、教員乗船 基礎乗船実習航海
函 館	09月 4 日(金)	09月 5 日(土)	函館キャンパス見学
室 蘭	09月 5 日(土)	09月 5 日(土)	45組学生乗船、教員乗船 基礎乗船実習
函 館	09月 7 日(月)	09月 8 日(火)	函館キャンパス見学
室 蘭	09月 8 日(火)	09月 8 日(火)	44組学生乗船、教員乗船 基礎乗船実習
函 館	09月 10 日(木)	09月 11 日(金)	函館キャンパス見学
室 蘭	09月 11 日(金)	09月 11 日(金)	47組学生乗船、教員乗船 基礎乗船実習
函 館	09月 13 日(日)	09月 14 日(月)	函館キャンパス見学
室 蘭	09月 14 日(月)		学生・TA 下船

H21年度「基礎乗船実習」概略スケジュール(詳細は付録を参照)

2009.4.23

1日目	1	2	3	4	5	6	7	8
11:00 札幌E棟玄関前集合								
11:30 バス出発								
14:00 室蘭港着								
14:15 乗船、点呼								
14:40 船長訓辞・対面式	班長の選任							
船内安全注意	船内見学	船教員						
船内生活説明	→ベッド作り	船教員						
15:40 出港	WellDk, 船橋甲板(P)で出港見学							
16:10 食当の説明	芳村							
17:00 夕食(食当:8直)	食当は30分前から配膳作業開始							食当
18:20 実習の全体説明	芳村							
19:00 ⑤イカ釣りの説明	亀井							
19:30 イカ釣実習(1-4直)	(5)							
20:30 イカ釣実習(5-8班)					(5)			
23:00 就寝								
2日目	1	2	3	4	5	6	7	8
6:30 起床、ウォッシュデッキ(1,2,3直), 清掃(4,5,6,8直)								
7:30 朝食(食当:7直)								食当
8:30 実習説明(プランクトン、目視観測)								
9:00 実習	①	①	②	②	③	③	④	④
11:30 昼食(食当:6直)								食当
12:20 実習	②	②	③	③	④	④	①	①
14:30 実習	③	③	④	④	①	①	②	②
17:00 夕食(食当:5直)								食当
18:30 実習説明(イカ鮮度調査)	細川・高木							
19:00 イカ釣実習(1-4直)	イカの鮮度実習(5-8直)							
20:15 イカ釣実習(5-8直)	イカの鮮度実習(1-4直)							
23:00 就寝	22:00-風呂・シャワー							
3日目	1	2	3	4	5	6	7	8
6:30 起床、ウォッシュデッキ(6,7,8直), 清掃(1,2,3,5直)								
7:30 朝食(食当:4直)								食当
8:10 実習	④	④	①	①	②	②	③	③
11:00 函館入港								
11:30 昼食(食当:3直)								
12:30 函館上陸 函バスにて送迎								
13:00 函館キャンパス見学	乗船教員							
16:00 乗船								
函館自由行動(単独行動は禁止、必ず複数にて)								
21:00 乗船・点呼								
21:10 各直のレポート作成								
23:00 就寝	20:00-風呂・シャワー							
4日目	1	2	3	4	5	6	7	8
6:00 函館出港								
6:30 起床、ウォッシュデッキ(4,5直)、清掃(1,3,6,7,8直)								
7:30 朝食(食当:2直)								食当
8:30 実習								
10:00 居室・船内の清掃								
11:30 昼食(食当:1直)								食当
12:40 個人レポートの作成 (12:30室蘭入港)								
13:40 各室点検 各室点検								
14:00 修了式 下船								
14:15 バス出発								
16:30 札幌E棟玄関前到着 解散								

乗船学生約58名を8班に分ける

実習内容

①
②
③
④
⑤
⑥

海図・気象海象観測、目視観測実習

船教員

CTDによる海洋観測実習

船教員

ロープワーク実習

前川・船教員

プランクトン採取・顕微鏡観察実習

山口

イカ釣り実習

前川 亀井

イカの鮮度調査

(細川) 高木

実習統括 :

学生引率 :

TA :

札幌キャンパス→乗船→札幌キャンパス

クラス担任

5名

3. 集合場所・時間

下記の集合日時に遅れないこと。集合場所は**札幌高等教育機能開発センターE棟 玄関前**に集合すること。
(雨天の場合は玄関ホール) 担任教員の引率でバスに乗車する。

・ 4 6組	9月 2日 (水)	11:00	(担任:水田先生)
・ 4 5組	9月 5日 (土)	11:00	(担任:向井先生)
・ 4 4組	9月 8日 (火)	11:00	(担任:松石先生)
・ 4 7組	9月 11日 (金)	11:00	(担任:岸村先生)

- ※ この実習は必修科目につき、遅刻して履修不可能となった学生は自動的に「不可」となる。
(やむを得ない理由に限り、2年次以降での履修が認められることがある。)
また、乗船できなくなった場合、実習中の食材は事前購入につき、食事代が請求されるので注意のこと。
- ※ 当日、事故、病気等でやむを得ず所定の時間に参加できない場合は下記に必ず連絡すること。
なお、おしょろ丸の電話番号は、乗船期間と併せて帰省先などに知らせておくこと。

Tel 090-3023-2412 おしょろ丸 通信長 経由 (乗船教員) 芳村
Tel 090-9801-5819 乗船実習教員 芳村携帯 (ただし、航海中は通信不可能な場合がある) e-mail y-yoshi@fish.hokudai.ac.jp

4. 学生携行品

下記のものを必ず持参すること。

1	印鑑	必ず朱肉を用いる印鑑。 シャチハタ等の簡易印鑑は不可。 (忘れた者は乗船中の食事代を支払うことになる。1日:1,065円)
2	乗船実習テキスト	このテキスト
3	健康保険証の写し	万一の事故に備える
4	筆記用具・電卓	鉛筆(またはシャープペン), ノート, 消しゴム, 電卓
5	短靴(通常の靴)	スニーカーでもよい。 乗船中のヒール靴は禁止。 サンダルは学生室のみ許可 (室外使用禁止)
6	長靴	海水・イカスミ等で汚れてもさしつかえないゴム長靴
7	カッパ(上下)	海水・イカスミ等で汚れてもさしつかえないもの
8	汚れても構わない服	襟付きの服。作業服がベスト。 実習時はジャージ、Tシャツは禁止
9	着替え	3日分。必ず長袖を含めること(北海道の晩夏の洋上は寒い)。
10	寝着	必ず持参, 冷房に弱い者は長袖。(寝具としてのジャージは可)
11	洗面用具	タオル・石鹼・シャンプー・櫛・必要最低限の衛生化粧品
12	薬	酔い止め薬など、(傷薬などの常備薬は船内に用意)
13	バス・帽子代 3,000円	乗船時に引き換え。つり銭のないように。

- ※ 船内の水道水は(一箇所のみ)飲料可能であるが、体調に不安な者はミネラル水を持参する。
- ※ 菓子・ソフトドリンクは持ち込み可であるが、適度にすること。**冷蔵庫は限られている**ので期待しないこと。
飲料などの自販機はない。お茶類のペットボトルは開栓後 24 時間以内に飲用し、残りは捨てること。
船酔いがひどい場合は食事がとれない状態になるので、スポーツ飲料等が望ましい。
- ※ **酒類の持ち込みは禁止。**(20 才以上の者でも)
- ※ 船内には公衆電話(船舶電話でクレジットカード式)がある。**携帯電話は洋上では通信できない。**
- ※ 実習に不要な物品は持ち込まないこと(特に**大型の運動用具、楽器、等は持ち込み禁止**)。
- ※ **船内での洗濯は禁止。**必ず、着替えを持参すること。
- ※ 多額の現金を持ち込まないこと。
- ※ ケガなどの常備薬は船内に備えてあるが、酔い止めを含む服用薬は各自持参すること。医師・看護士は乗船しない。持病・体調に不安がある者は事前に医師に相談しておくこと)。また、食事にアレルギーがあれば、乗船前に必ず書面で届けること。
- ※ 乗船前に**「学生教育研究災害障害保険(学研災)」への加入を確実にすること**(未加入者はこれを機会に加入すること。詳しくは入学時配布の「保険のあんない」「学生生活のあんない」「学生便覧 P.65」を参照のこと。案内は学務部学生支援課 福利厚生担当③窓口(電話011-706-7467・7469)で行っている。
- ※ はしか(麻疹)にかかったことがない者、はしかの予防接種を受けたことのない者は必ず予防接種を行っておくこと。

5. 乗船中の注意事項

- ① 時間厳守(船内では、いつも5分前集合)
- ② 乗船中は船長以下乗組員の指示に従う。
- ③ ごみは分別回収。船外に捨てないこと。
- ④ 屋外デッキ(暴露甲板)への外出:
 - (1)出入港等で教員から許可された場合、実習を行う場合
 - (2)夜間航海中は禁止(舷外扉を閉鎖)
 - (3)停泊中あるいは昼間航行中は単独では禁止。
複数ならば許可(ただし、帽子・ライフジャケット必着)
- ⑤ 洋上では携帯電話は届かない。
- ⑥ サンダルは学生居室(ベッドルーム)内のみ使用許可。**サンダルでの通路・階段の通行は厳禁。**
- ⑦ **通路・階段は静かに歩く。**(船は24時間当直体制で、仮眠中の乗組員が常にいることに注意)
- ⑧ 海洋観測実習、プランクトン採集、イカ釣り実習ではカッパ上下、長靴、ヘルメット、ライフジャケットを必ず着用すること。
- ⑨ 常に室内を清潔に保ち、他人に迷惑をかけない。
- ⑩ 喫煙は所定の場所で行う。学生居室・通路は禁煙。
- ⑪ 火災を発見したら、ためらわずに最寄りの警報器を作動させ通報すること。自分達だけで消火しないこと。
- ⑫ トイレでは備え付けのトイレットペーパー以外の使用禁止。
- ⑬ 節水に心がけること。洗濯機は使用禁止。風呂・シャワーの利用については教員の指示に従うこと。
- ⑭ 船酔いで気分が悪くて食事をとれないときは必ず班長に連絡する。
- ⑮ 乗船中、ケガや体調が悪くなった場合は教員に必ず申し出ること。

6. 実習内容

6. 1 気象・海象観測実習、操船実習、目視観測実習

1) 気象・海象観測

- 風速・風向 : (超音波風速計・風向風速計)
- 気温・湿度 : (乾湿計、乾球・湿球(湿度))
- 気圧 : (アネロイド気圧計)
- 波高 : 波浪の波高・周期・方位(目測)



図 1.1 船の風向風速計



図 1.2 アネロイド気圧計



波浪の観測

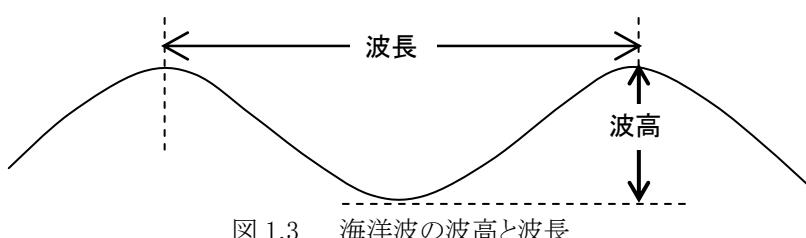


図 1.3 海洋波の波高と波長

【天候の種類と符号】

代表的な天候の符号 Weather Notation			
b	晴天	Blue sky	(Cloud 0~2)
bc	半晴	Fine but Cloudy	(Cloud 3~7)
c	曇	Cloudy	(Cloud 8~10)
f	霧	Fog	
h	雹(ヒヨウ)	Hail	
m	靄(モヤ)	Mist	
p	驟雨	Passing showers	
r	雨	Rain	
s	雪	Snow	
t	雷	Thunder	

【風力階級】

気象庁風力階級表(ビューフォート風力階級表) Beaufort Scale				
風力階級	説明	相当風速		参考波高
		(knots)	(m/s)	
0	鏡のよう海面	~1	0~0.3	
1	鱗のようなさざなみができるが波がしらに泡はない	1~4	0.3~1.6	0.1(0.1)
2	小波の小さいもので、まだ短いがはっきりしてくる。波頭はなめらかに見え、砕けていない。	4~7	1.6~3.4	0.2(0.3)
3	小波の大きいもの。波がしらが砕けはじめる。泡がガラスのように見える。ところどころ白波が現われることがある。	7~11	3.4~5.5	0.6(1)
4	波の小さいもので長くなる。白波がかなり多くなる。	11~17	5.5~8.0	1(1.5)
5	波の中位なもので、いっそうはっきりして長くなる。白波がたくさん現われる。(しぶきを生ずることもある。)	17~22	8.0~10.8	2(2.5)
6	波の大きいものがはじめる。いたるところで白く泡立った波頭の範囲がいっそう広くなる。(しぶきを生ずることが多い)	22~28	10.8~13.9	3(4)
7	波はますます大きくなり、波頭が砕けてできた白い泡は、スジを引いて風下に吹き流されはじめる	28~34	13.9~17.2	4(5.5)
8	大波のやや小さいもので、長さが長くなる。波頭の端は砕けて水けむりとなりはじめる。泡は明瞭なスジを引いて風下に吹き流される。	34~41	17.2~20.8	5.5(7.5)
9	大波。泡は濃いスジを引いて風下に吹き流される。波頭はのめり、くずれ落ち、逆巻きはじめめる。しぶきのため視程がそこなわれることもある。	41~48	20.8~24.5	7(10)
10	波がしらが長くのしかかるような非常に高い大波。大きな塊となった泡は、濃い白色のスジを引いて風下に吹き流される。海面は全体として白く見える。波のくずれかたは、はげしく、衝撃的になる。視程は損なわれる。	48~56	24.5~28.5	9(12.5)
11	山のようないい大波。中・小船舶は、一時波の陰に見えなくなることもある。海面は風下に吹き流された長い白色の泡の塊で完全に覆われる。いたるところで波がしらの端が吹き飛ばされて水けむりとなる。視程は損なわれる。	56~64	28.5~32.7	11.5(16)
12	大気は泡としぶきが充满する。海面は吹き飛ぶしぶきのために完全に白くなる。視程は、著しく損なわれる。	≥64	≥32.7	14

2) 海図記入

一定時間毎に船の位置を GPS によって緯度・経度を読み取り、これを海図上にプロットする。また、船が1時間に航走した距離(NM)を算出し、船の対地速度(knots)を算出する。(船の速度計は対水流速を測っているので、潮流などによって、対地速度が変わってくる。)

この実習では、コピーした海図を用い、プロットした船の航跡や船の速度を算出した結果をレポートに添付する。

【海洋における距離や速度の単位】

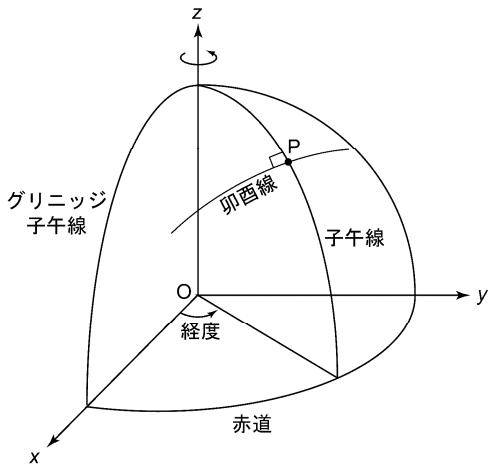
海里(Nautical Mile :NM)

船や飛行機では大陸間を航行するので、緯度、経度という角度座標を用いた方が便利である。

この場合の距離は、緯度1分($1^\circ / 60$)の長さが地球上でほぼ一定(地球を真球とした場合)であることから、この長さを1海里(Nautical Mile)と定義し、メートルに代わる単位としてSI単位系(国際単位系)でも認められている。これをメートルに換算すると、

$$1\text{ NM} = 40,000 / 360^\circ / 60 = 1,852\text{ m}$$

これに対し、経度1分の長さは赤道では上記と同じ長さになるが、緯度によって異なる。地球を真球とすると、経度1分の長さ= $1,852\text{ m} \times \cos(\text{緯度})$ となる。



ノット(knots)

船・航空機など大圏航行する場合の速度の単位で、一時間に上記1NM 移動する速さを1ノットと言う。

<ついでに角度と時間について再確認>

時間

地球の自転時間(1周の回転時間)を24時間とし、1時間を更に60分法を用いて、 $1^\circ = 60'$ (分, minute), $1' = 60''$ (秒, second)として下位の単位を定める。したがって、1時間= 15° の地球の回転時間となる。(次の角度の度数と混合しないように注意！)

角度

平面を定点を通る直線によって360等分する時、その等分された一つの角として定まる角度を1度(°)として基本単位に持つ単位系。更に、60分法を用いて、 $1^\circ = 60'$ (分), $1' = 60''$ (秒)として下位の単位を定める。したがって、全方位角は 360° となる。

この体系は時間同様60進数であり、暦における1年の日数(≈360日)に由来している。

角度の度数と時間の関係は密である。角度は全周 360° に対し、時間は24 h(1時間= 15°)地球上で、南中時刻を見れば経度が求まる。このため、船の航海には正確な時計が不可欠であった。緯度は(北半球では)北極星の仰角を計測すれば求まる。

3) 操船実習

ブリッジ(操舵室)に携帯電話の持ち込みは禁止。持ち込んだ場合は必ず電源をOFFにする。
服装は必ず襟付きのシャツ、帽子を着用のこと。Gパン、ジャージ、Tシャツ、長靴は禁止

船は操舵(Steering)によって船の進行方向がコントロールされる。洋上では、通常設定された針路(Course)に船首を向けて定針(Set Course)させるが、風波などで船首が左右に振れるとこれを抑えるために当て舵(反対の舵角)を取るなどして保針する。一方、屈曲航路や船舶交通量の多い場合、操舵手は航海士からの操舵号令に従い変針(Altering Course)、定針を繰り返す。

(1)慣用操舵号令

① 右回頭

「Starboard!」(面舵:おもかじ):右へ舵角 15° とれ！

「Starboard Easy!」(面舵少し):右へ舵角 7° とれ！

「Hard Starboard!」(面舵一杯):右一杯(35°)に舵をきれ！

② 左回頭

「Port!」(取り舵:とりかじ):左へ舵角 15° とれ！

「Port Easy!」(取り舵少し):左へ舵角 7° とれ！

「Hard Port!」(取り舵一杯):左一杯(35°)に舵をきれ！

③ 定針動作

「Midships！」(舵中央)：舵角を 0° に戻せ！

「Steady!」(宜候:よーそろ)：発令時の船首方位に向けよ！

(2) 航海士と操舵員間の操舵号令のやりとり

操舵員は指令された号令を必ず復唱(Answer back)して、両者間の伝達が正しいかどうかを確認しなければならない。

<例> 航海士：“Starboard easy (or ten, twenty.など操舵角を指定する場合もある)！”

操舵員：“Starboard easy (or ten, twentyなど)！”と復唱してから舵角をきる。

※舵輪をきってから舵板が指令舵角に達するまでに数秒から十数秒かかる。

操舵員：舵が指令舵角になったら，“Starboard easy (or ten, twentyなど), Sir!”

航海士：「はい。」、「了解。」，“Thank you” etc.

航海士：希望の針路に近づいていたら，“Midships!”

操舵員：“Midships”と復唱してから舵を中央に戻す。

※この間も舵輪をまわしてから舵板が中央にもどるまでに数秒から十数秒かかる。

操舵員：舵が中央になったら，“Midship, Sir!”

航海士：「はい。」または「了解。」，“Thank you” etc.

航海士：目的の針路に定針させるために“Steady (as she goes)!”または“Course<○○○°>!”

操舵員：“Steady<○○○°>！”または“Course<○○○°>!”と復唱してから早く指令の針路に定針させる。

操舵員：指示された針路に定針したら，“Steady on<○○○°>, Sir!

”または“Course<○○○°>, Sir!”

航海士：「はい。」、「了解。」，“Thank you” etc.

【船の右・左・中央】

船の部位を示す用語には、独特なものがよく使われている。

①右

Starboard (Starboard side) とは、船を縦にした中心線から右側のことを右舷と言う。

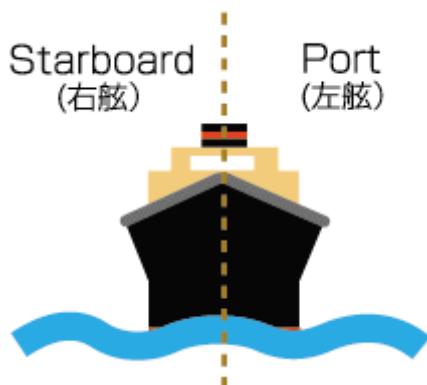
昔の舵は今日のように船尾ではなく船側についていた。その船側舵は右舷に取り付けられることが多く、特にバイキング船の舵は必ず右舷だった。右舷で操舵(steer)するため右舷のことを Steer Board といい、それが変化して Starboard というようになった。船長の居室も伝統的に右舷に設けられており、伝統を重んじる海軍では艦長がボートで乗下艦するときは右舷側の舷梯(はしご)を使用する。

②左

これに対し、船の中心線から左側のことを左舷といい、英語では、Port または Port side と言う。これは昔、右舷に舵をつけていたため、着岸は左舷側を利用せざるを得ず、左舷が岸壁側すなわち Portside(港側)となっていたためである。今日、航空機が左側の出入り口を用いて乗り降りするが、これは航空機が船の伝統を引き継いでいるからと言われている。

③中央

船の左右の中央は中心線”center line”であり、船の前後方向の中央を”Mid-ship”と言う。これは、”mid(中央)”と”ship(船)”からなっている。また、操船用語では舵中央(舵角 0°)の意味になる。



4) 鯨類および海鳥の目視観測

航行中に目視調査(ライントランセクト法)によって、大型動物を発見、記録し、その分布や密度を推定する。この実習では、鯨類イルカ類と海鳥の目視調査の理論および実際について、その違いを学習する。

(1) 実習内容:

ライントランセクトの基礎、目視による鯨類、海鳥の判別、双眼鏡の使用法、海洋生物の発見・判別・記録(船上にて実習)目視によって海洋生物の発見につとめる。

集合:

担当時刻の5分前(時間厳守)に、学生食堂に集合する。

班長が点呼をとり、人数がそろったらアッパーブリッジに上がる。

実施場所:

基本的にはアッパーブリッジ、およびブリッジサイド。

なお、悪天候時などは人数を限定してブリッジ内で行うこともある。

注意:

アッパーブリッジやブリッジ内では、操船のじやまにならないように、静肅にすること。

特に、アッパーブリッジの床を蹴ったり飛んだりしないこと。

ブリッジ内で調査するときは、中央には立たず、左右で行うこと。

担当班以外の人も目視調査に加わっても良いが、後方や側方で行うこと。

(2) 鯨類目視要領

角度: 船の進行方向に対して左右どの角度に最初に発見したか

距離: 船からの推定距離を海里(1.852km)単位で記入

(発見の)きっかけ:噴気・水しぶき・鯨体・リング・水色などと記入

行動: 低速遊泳中・高速遊泳中・潜水・浮遊中などと記入

最近距離: 発見してから観測を中止するまでに最も近づいたときの距離を海里単位で記入

調査モード: 調査中か調査外(ドリフト中や操業中)か記入

種名: 種名を記入、種不明の場合は「種不明アカボウクジラ科鯨類」、「種不明イルカ」「種不明鰐足類」などと記入

個体数: 推定個体数を記入

発見者: 第一発見者名を記入、乗組員の場合は職名も

観測者: 観測した人の名前(全員)を記入

備考: 気がついたこと(海況や鯨類の体長、子連の有無など)を詳細に記入。

※ 鯨種判別の目安 (出現する可能性の高い鯨種)

背 鰭 の 形 状	三 角 型	高く大きい二等辺三角形	→	シャチ (オス)
		2色で後縁部が白 (体に大きな白斑)	→	イシイルカ
		1色	→	ネズミイルカ
鎌 型	2色で後縁部が白	2色で後縁部が白	→	カマイルカ
		1色	幅が広く低い	コビレゴンドウ
	高い			シャチ (メス)

(3) 海鳥目視要領

観測は、日中の全速航行中に、風下側の船橋甲板上で船首方向より正横方向までの90°の範囲に出現した個体について行う。記録範囲は200mとする(図1)。ブリッジ中央に立ち、船首のポール先端を見た時、その延長線上の海面までの距離が約200mである(水平時)。また、13k'tにて航走した時、30秒間に進む距離も約200mである(図2)。

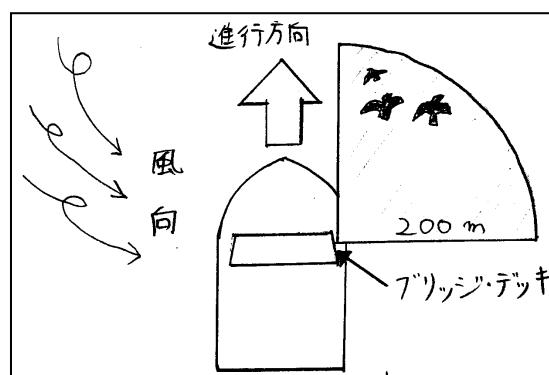


図1.4 観測範囲

観測中、裸眼にて海上の鳥を発見し、次に双眼鏡にて行動観察を行う。主に使用する双眼鏡は8~9倍で、口径の広く視野の明るいものがよい。また、視界が悪い時やよく似た鳥を判別する際、補助的に20倍の双眼鏡を使用する。観測範囲内に鳥を発見したら、1分間隔で時刻を記入ながら、その1分間に観察された種名、個体数、行動、飛翔方向を記入する。個体数は小群単位の個体数を記入するのが望ましい。個体数は、100羽以下の群で1羽単位、100~500羽の群で10羽単位、500羽以上の群では100羽単位で記録する。行動は飛翔個体か水面固体かを区別する。

※出現する可能性の高い海鳥

オオセグロカモメ、ウミネコ、コアホウドリ、ハシボソミズナギドリ、オオミズナギドリ

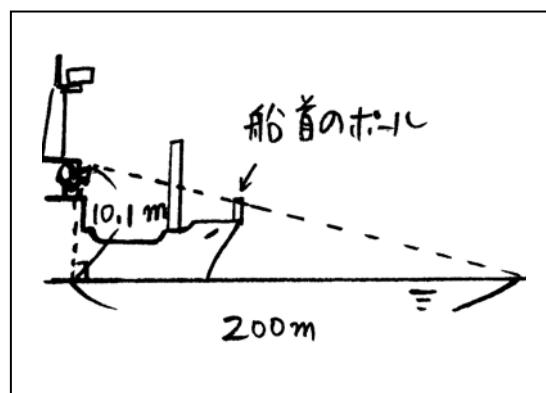


図 1.5 200m の目安

6. 2 CTD 等による海洋観測実習

1) 表面水温の測定

表面海水採水用バケツのロープが船上に固定されているのを確認して海面に降ろして採水し、それを捨てる。この作業を2-3回くり返し、バケツの温度を海表面となじませ、**共洗い**(ともあらい:測定する試水で容器を洗浄し、**コンタミネーション**を防ぐ)の後に採水し、棒状温度計を入れて温度が定まるまで日陰に放置し(約1分程度)、水温を**小数1桁**まで読み取る。

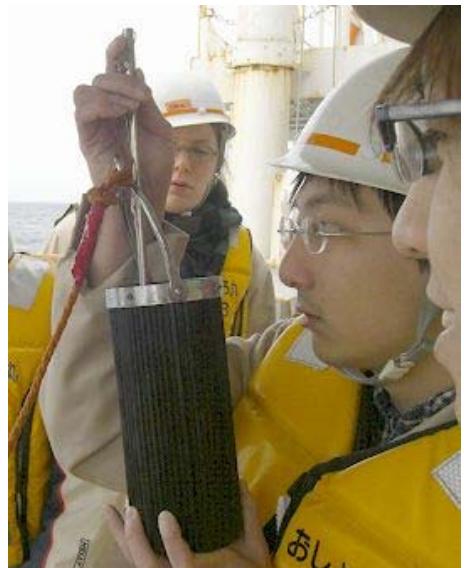


図 2.1 表層水温計測

2) 水色・透明度の測定

日出から日没までの昼間の観測では、**透明度板**(セッキー・ディスク: Secchi Disk, 図 2.2)を水中に降ろし、**可視限界水深(透明度板が完全に見えなくなる深度)**を測定する。その際、透明度板上の海水の色を**フォーレル水色(すいしょく)計**(図 2.3)と比べて、**水色(11階級)**を決定する。**透明度の約3倍の深度がその海域の有光層**(植物プランクトンの光合成による酸素の生産が呼吸による消費より大きい層: Euphotic Layer)とされている。



図 2.2 透明度観測



図 2.3 水色観測

3) 海水中の水温・塩分等の測定

CTD を用いて海面から観測水深までの**水温・塩分を連続的に測定**する。CTD (図 2.4)とは **C**(Conductivity: 電導度), **T**(Temperature: 温度), **D**(Depth: 水深)の略で、船上コンピュータにリアルタイムで海洋中の温度・塩分・水深(測定しているのは圧力、水圧の1dbar(デシ・バール)は、ほぼ水深の1mに相当する)データを送信する海洋観測機器。他にも、溶存酸素・蛍光度センサーなども取り付けて測定する事ができ、採水器:**RMS (Rosette Multi Sampler)**を用いて船上から任意の深さで採水することもできる。

塩分の値は、古くは塩分濃度(NaCl 濃度、単位は‰)を用いていたが、現在は電気伝導度からの換算値を用いて無単位の数字、または **psu** (*practical salinity unit*) を用いてあらわす。海水の密度は温度と塩分から求める事ができ(低温→高密度、高塩分→高密度)、水温と塩分の鉛直変化によって、表層の軽い水から深層の重い水までその値が変化する。密度の単位は kg/m^3 であるが、変化の無い上位2桁を除いて σ_t (シグマ・ティー)で表わされる。

(例: $1025.4 \text{ kg}/\text{m}^3$ の場合は $\sigma_t = 25.4$)

4) レポートの作成: 観測海域の水塊特性を調べる

噴火湾湾口から日高湾の観測海域は、夏から秋にかけて、津軽海峡から流出した津軽暖流水が表層に大きく張りだし (**Gyre Mode**, 図 2.4 参照), 夏期の昇温と重なって海表面は高い水温を示す(図 2.6 上)。しかしその下層には、低温・低塩分な水塊特性を持つ日高海盆の底層水が存在する。冬から春にかけては、親潮系水の勢力が強くなり、冬季の海面冷却と合わせて低温の水が湾内を覆い(図 2.6 下), 津軽暖流は下北半島に沿って南下する (**Coastal Mode**, 図 2.5 参照)。

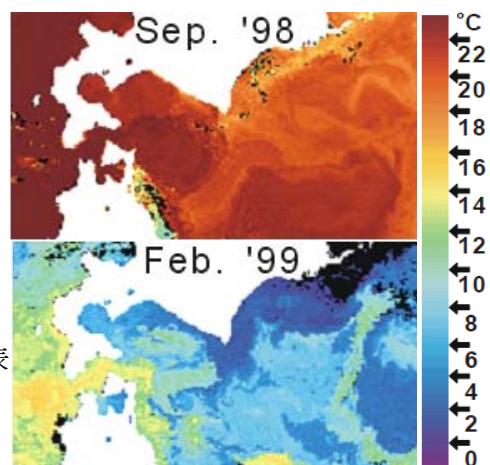


図 2.5 観測点周辺における海流系の模式図

図 2.6
月単位の合成海表面温度衛星画像
(上:1998年9月,
下:1999年2月)



図 2.4 CTD と RMS



得られたCTDデータから、グラフ用紙の縦軸に水圧(dbar=水深m), 横軸に水温(°C)・塩分(psu)を目盛り、**水温と塩分が深さに応じてどのように変化(プロファイル図)**しているかを調べる。また、縦軸に水温(°C), 横軸に塩分(psu)を目盛り、**T-Sダイアグラム**(図 2.7 参照)を作成する。得られた水温・塩分のプロファイルと**T-Sダイアグラム**から、水温躍層・塩分躍層(値が大きく変化する層)を調べ、**津軽暖流水(黒潮系の高温・高塩分水)**と日高海盆の**底層水(親潮系の低温・低塩分水)**の水塊が、どのように鉛直分布しているかを考察する。

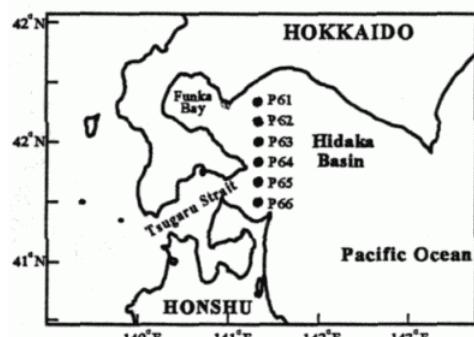
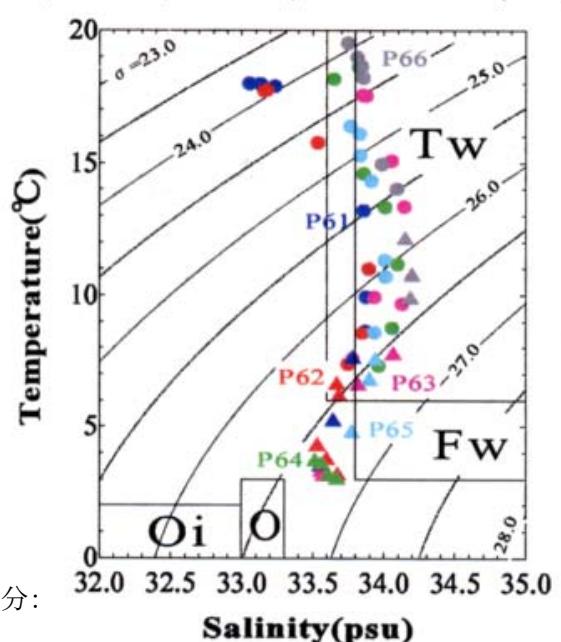


図 2.7 1991年9-10月の海洋観測点とT-Sダイアグラム(水塊区分:
Tw:津軽暖流水, Fw:冬季噴火湾水, Oi:沿岸親潮水, O:親潮水)



6. 3 ロープワーク

※この課題に対するレポートは特に作成する必要がない。

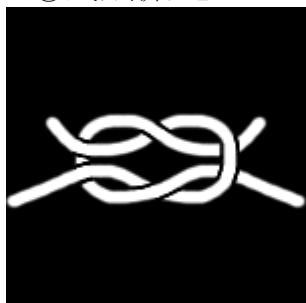
1) ロープ同士を結ぶ

(1) 本結び (同じ太さのロープ同士を結ぶ)

- ◆強度が高い
- ◆簡単に結べる
- ◆コツをつかめば手早く解くことができる



※①は強く折り返してOK



2) こずなつなぎ (carrick bend)

- ◆太いロープ同士をつなぐのに適している
- ◆結び易く、解き易い

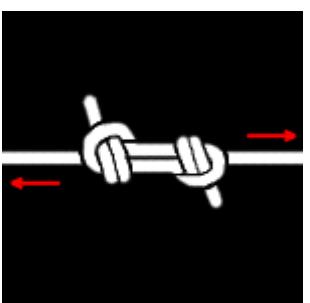
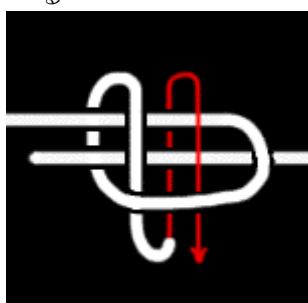


- ・太さ、材質の異なるロープを結ぶと、滑り解ける恐れ
- ・太いロープ同士の結びには向かない
- ・似た結びで「たて結び」があるが、強度が極端に弱いので間違わないこと

- ・両端のロープ先端を包縛しなければならないのが面倒であり欠点
- ・「本結び」とは違うので間違わないこと
- ・結び・包縛はしっかりと行うこと

(3) 二重テグス結び (double sheet bend)

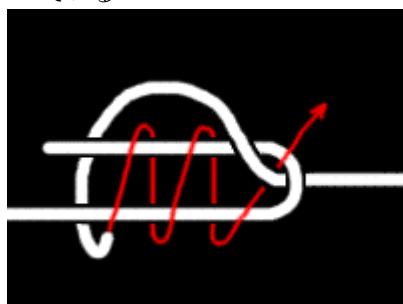
- ◆釣り糸や太さの違うロープ同士をつなぐのに適している



- ・バランスを取るために、両方の結び端が逆になるようにする

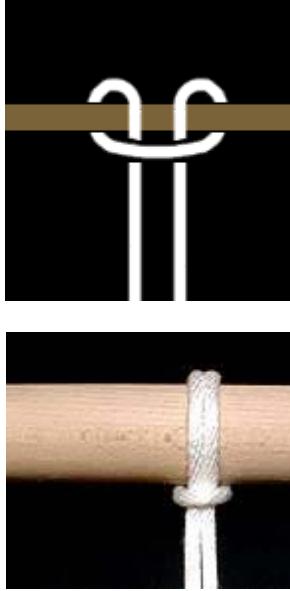
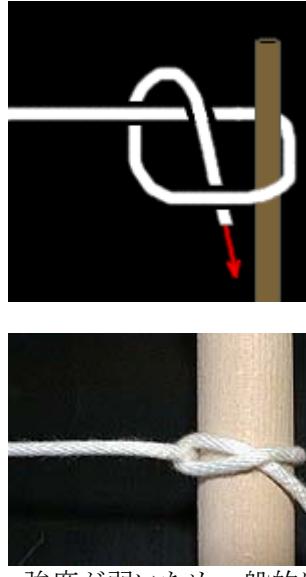
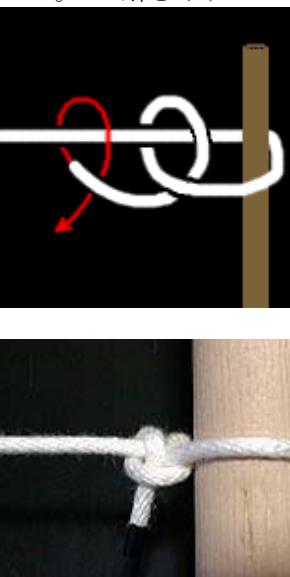
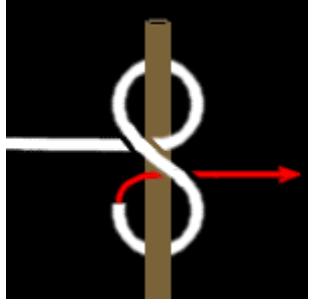
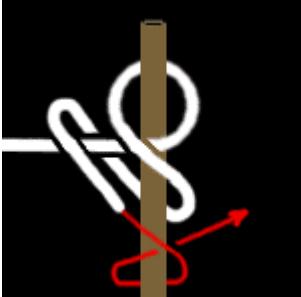
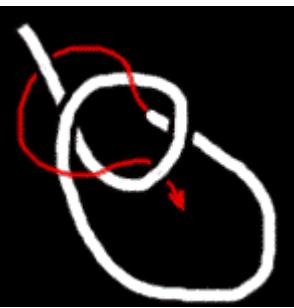
(4) 三重つぎ (ロープ同士を結ぶ)

- ◆太さや種類の違うロープ同士をつなぐのに適している



- ・上図赤線を2回巻けば二重つぎ、1回巻けば一重つぎとなり、巻数が多くなるほど強度が増す。
- ・コツをつかめば簡単に解くことができる

2) 物にロープを結ぶ・縛る

<p>(1) ひばり結び (ring hitch)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆強度も強く、結び易く解きやすい。  <p>簡単なため、一般によく用いられる。</p>	<p>(2) ひと結び (half hitch)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆簡単に結べる  <p>・強度が弱いため一般的にはあまり用いられないが、この結びを繰り返したり、他の結びと合わせることにより強度が増す</p>	<p>(3) ふた結び(two half hitch)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆「ひと結び」を2回繰返した結び ◆簡単に結べ、比較的強度が高い。また解きやすい  <p>・結び方が簡単で一度覚えたらあまり忘れないでよく利用する</p>
<p>(4) 卷き結び（物を縛ったりする結び）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆一般によく知られた結び。 ◆結び易い ◆一度縛ったら緩みにくい  	<p>(5) 2重巻き結び（滑らかな表面を持つ物に、ロープが滑らないようにする結び）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆確実に締まる ◆重量物の吊下げも可能 ◆幅広い用途に用いられる太さや種類の違うロープ同士をつなぐのに適している   <p>・解けにくいため、後で解くことが困難。</p>	<p>(6) もやい結び(bowline knot)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆輪の大きさが変わらない ◆強度が高い ◆ロープの太さに関わらず結びやすく、解きやすい ◆比較的簡単に結べる ◆非常に幅広い用途に用いられる   <p>・よく使われる結び方であり、人命救助などにも使われる所以、覚えておきたい。</p>

本節の図・写真:「ロープワークの達人」URL: <http://www1.ocn.ne.jp/~tatsujin/ropework/index.html> より引用

6. 4 プランクトン採取・顕微鏡観察実習

1) 実習目的:

海洋生態系において低次生産をない、高次生物への生産物供給の機能的役割を果たしている動物プランクトンの定量採集方法を理解する。動物プランクトンの主要な分類群とその摂餌行動について理解する。

2) 実習内容:

プランクトンネットによりプランクトン採集を行い、どのような分類群がいるかの観察を行う。観測地点 1 地点につき 1 班が担当する。左舷中央部の観測台周辺に 5 分前までに完全装備(ヘルメット、カッパ上下、ライフジャケット、長靴、ゴム手)で集合する。

3) NORPACネットによる動物プランクトンの採集

濾水計を装着したNORPACネット(NORth PACific Standard Net: 北太平洋標準ネット)による鉛直曳き(えんちょくびき)採集を行う。

①海面に降ろす前には以下の点を確認する。

- ・濾水計の針が全て 0 にセットされているか
- ・コッドエンド(ネット後端の採集物を集める部分)のチューブがクリップによって止められているか
- ・ワイヤーとネットやネットとおもりを繋ぐ各部分のシャックル(U 字金具)が緩み無く、しっかりと締められているか

②海面に降ろしてネットを回収する手順は以下の通りである。素早い動作および的確な判断と指示が出来るように、大きな声でしっかりと話すこと。

- ・ブリッジに水深を確認する「ブリッジ、水深○○ m までお願いします」。水深が 150 m より深い際には水深 150 m、それより浅い際には「[水深-5 m] からの鉛直曳きを行う。
- ・ワインチを操作員に「水深○○ m までお願いします」と、ネット繰り出しのワイヤー長を告げて、その深度までワイヤーを繰り出してもらう。ワイヤーは危険なので、素手で触ったり、巻き込まれないように注意する。
- ・所定水深までワイヤー長を出してもらったら、傾角板(けいかくばん)でワイヤー角度を測定する。ワイヤー角度から、所定水深に達するまでにさらに何メートルが必要かを計算し(角度-深度の早見表がある)、ワインチ操作員に「プラス○メートルお願いします」と告げる。
- ・所定水深までワイヤーを繰り出したら「毎秒1メートルで巻き上げお願いします」と、巻き上げをお願いする。
- ・記録係は時刻、深度、ネット曳網(えいもう)深度、ワイヤー傾角(けいかく)など必要事項を記録する。
- ・揚がってきたネットは外側より海水ホースにて流して、ネット地に付いたプランクトンをコッドエンドに集める。回収後、海水を張ったバケツにてネットを洗い、内容物を 2 リットルビッチャーに注ぐ。
- ・濾水計の回転数を読む。記録係は回転数を野帳に記載する。回転数の記録が終わったら、次の採集に備えて濾水計の目盛りは零に直しておく。

4) 動物プランクトンの観察

得られたプランクトン標本は生きている状態で学生教室に持ち帰り、実態顕微鏡下でどのような分類群がいるのかの観察を行う。主要分類群として、

- ・甲殻類のカイアシ類(*Copepoda*: コペポーダ、次頁左図)
 - ・毛顎類(もうがくるい)のヤムシ類(*Chaetognatha*: キートゴナーサ、次頁右図)
- は少なくとも分かるようになりたい。

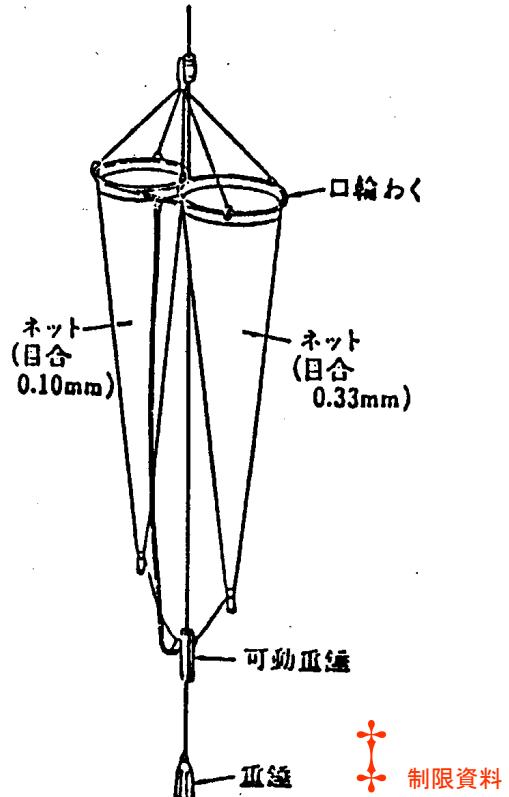


図 4.1 並列型 NORPAC ネットの例
(Motoda, S. 1957. North Pacific standard plankton net.
日本プランクトン研究連絡会報第4号より引用)



図 4.2 Copepoda: コペポーダ

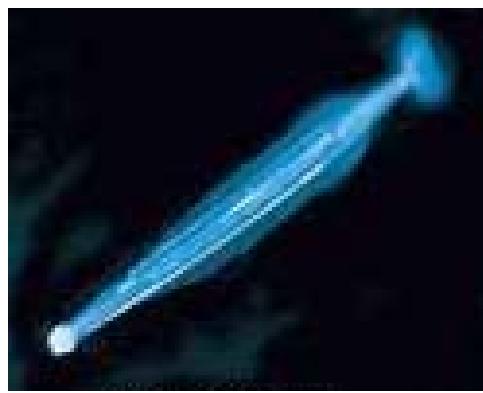


図 4.3 Chaetognatha: キートゴナーサ

写真提供:
帰山秀樹氏

上記2分類群は海洋全動物プランクトン生物量の約 80%以上を占める。最重要分類群である。第2研究室に用意するパネルの説明を見て、それぞれの分類群の体制構造を理解する。カイアシ類の多くは植物プランクトン食性である。摂餌に使う口器付属肢(こうきふぞくし)を実体顕微鏡下にて観察する。ヤムシ類は完全な肉食性であり、カイアシ類が主要な餌生物である。口の先端に摂餌に使用する顎毛(がくもう)が生えていることを実体顕微鏡下にて観察する。動物プランクトン試料中には上記2分類群以外にも多くの分類群が採集される。図鑑を見て、どのような分類群を同定する。

観察終了後、希望者はプランクトンの永久標本を作成することができる。ただし永久標本の作成には薬品(ホルマリン)による固定を行うので、標本を入れた瓶を割らないように(特に輸送時には細心の注意を払うこと)気をつけること。また永久標本は開けないように注意すること(固定液が漏れ出る、気化して危険なため)。

5) レポートの作成

- NORPAC ネットの濾水量(濾過した水の容量)を以下の式により計算する。

濾水計1回転あたりの濾水量(v: m³) (NORPAC ネットの口径は 45 cm)

$$(\pi \times (\text{半径 [m]})^2 \times \text{無網試験での水深 [m]}) \div \text{無網試験での平均値}$$

$$= (\pi \times (0.45/2)^2 \times \text{無網試験での水深 [m]}) \div \text{無網試験での平均値}$$

実際の濾水量(V: m³)

$$= \text{曳網時の濾水計回転数} \times v$$

- 採集されたプランクトン群集を解析する。主要分類群5つを挙げて、全体に占める各分類群の割合を記号で示す。

CC: 非常に多い(Abundant) >45%

C: 多い(Frequent) 30%

+: 普通(Common) 15%

R: 少ない(Rare) 8%

RR: 稀(Very rare) 2%

6. 5 イカ釣り実習

1) 実習の目的

手釣りによるイカ釣りの漁具構成を知り、イカの釣獲に好ましい釣針の操作(シャクリ運動)から釣針の運動とイカの釣獲の関連を明らかにする。また、獲れたイカの重量・体長(外套長)・雌雄を計測する。

2) イカ釣り実習

イカを釣るときは、釣糸を海中に垂らして静止させておいてあまり良く釣れない。餌と間違えさせてアタックさせなければならないので、擬餌針(釣針)が踊るように釣糸を上下運動させなければならない。このような釣針運動をさせることを「シャクリを入れる」と言う。釣糸の上下運動においてイカの針がかりを感じるには、手による感触によって行う。釣糸をしゃくったとき、針がかりしていないと感じたときは釣糸を下げ、針がかりを感じたときは、ただちに、釣糸を船上に引き上げる。釣獲しているにもかかわらず、釣糸を下げるとイカがはざれて逃避してしまう。各自、これらの方法について体験をしてみよう。

腕を舷側から出さなければならないので、身を乗り出さないよう、海中転落に十分気をつけて実習すること。**長靴、ライフジャケット、ヘルメットを必ず着用すること。**

①釣具の仕立て

手釣りによるイカ釣りの釣り具は、図 5.1 に示すように、**擬餌針**、**釣糸**(ナイロンテグス)、**分銅(おもり)**、**スイブル(撲り戻し)**、**水中ライト**(単三乾電池1本と豆球)、擬餌針と釣糸を海中に下ろすための**導糸(みらいと)**、釣具を整理する**糸巻き**で構成する。

擬餌針は、図 5.2 に示すように、投針(なげばり:商品名)と呼ばれる全長 18~21cm の針を用いる。針の部分は、高さ 1cm で返しのない"傘状"の形状をしており、1 段のものと 2 段のものがある。手釣りでは、イカがかかるたびに釣針を直接つかんで、外さなければならぬので、柄の部分が長くなっている。その表面には、光が良く反射するように反射材が取り付けられている。また、擬餌針が海中で自由に動くように片端だけがナイロンテグスに取り付けられている。

②釣り具の準備とシャクリの入れ方

緩んでいる水中ランプのカバーをきつづ締めて、ランプを点灯させると同時に、オーリングによる防水を完全にしてから釣具を海中に入れる。擬餌針とナイロンテグスが絡みやすいので、糸巻きから外すときには注意が必要。また、釣り手の間隔が狭いと、潮流によって隣との針絡み(お祭りとか喧嘩などと呼ばれる)を生じやすないので、適当な間隔を空ける。

適当な水深まで針を下ろしたら、導糸をつかんで腕を上下運動させ、シャクリを入れる。イカの群が濃いときは、シャクリの入れ方(技能)にはあまり影響されず、いくらでも釣れると言われている。しかし、群が薄いときはシャクリの入れ方によって、釣獲量に差が出る。腕の上下運動を色々工夫して、シャクリの入れ方を変え、良く釣れるシャクリは、どのようにすれば良いかを試してみる。

③釣獲時の釣具の引き上げとイカのはずし方

釣糸を引き上げて、釣針の柄の部分をつかんで船内に取り込む。イカを外すには、針に返しがないので針の部分を上にし、逆さにすると簡単に外れて床に落とすことができる。イカは 1 本の擬餌針だけでなく、複数の針で釣獲されていることがあるので、一番下の針まで上げて釣獲を確認する。

3)外套長・重量の計測

手釣りによって釣獲されたスルメイカの測定データを直ごとに、次頁の表のように作成する。記入項目は釣獲日時、漁場、釣獲水深、水温、外套長、体重(全体重)、雌雄の別、である。

4)レポートの作成

手釣りによって釣獲されたスルメイカの測定データを基に、外套長、体重それぞれについて、①平均値、②標準偏差、③ヒストグラム(図 5.3)を作成する。詳細は船上にて説明する。

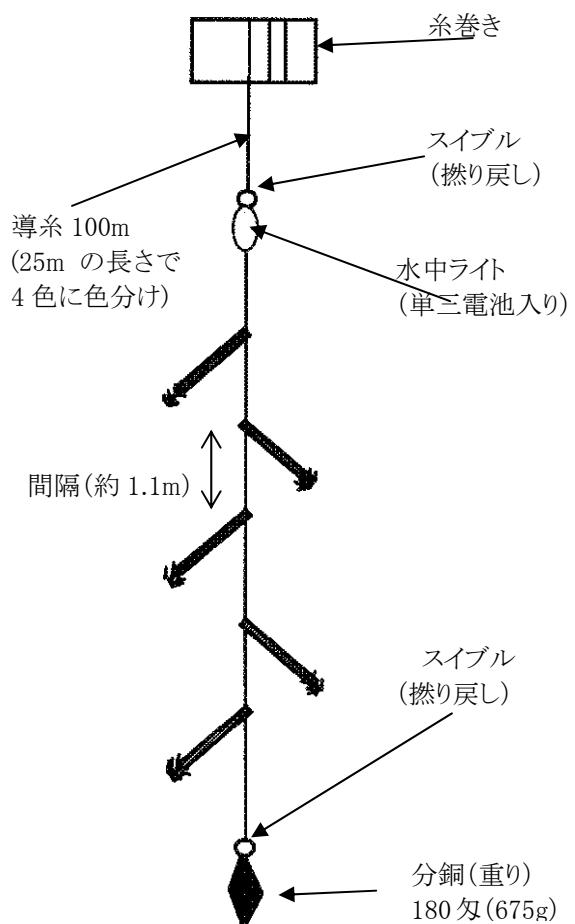


図 5.1 イカ釣り具の構成



図 5.2 擬餌針と水中ライト

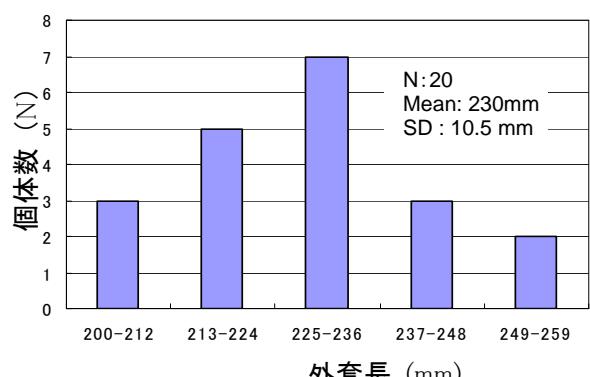


図 5.3 外套長のヒストグラム

スルメイカ測定野帳

直: 記帳者:

採集日時		漁獲水深	
採集海域	N, E()	水温 (°C)	

番号	外套長 (mm)	体重量 (g)	雌雄	メ モ	番号	外套長 (mm)	体重量 (g)	雌雄	メ モ
1			♂・♀		31			♂・♀	
2			♂・♀		32			♂・♀	
3			♂・♀		33			♂・♀	
4			♂・♀		34			♂・♀	
5			♂・♀		35			♂・♀	
6			♂・♀		36			♂・♀	
7			♂・♀		37			♂・♀	
8			♂・♀		38			♂・♀	
9			♂・♀		39			♂・♀	
10			♂・♀		40			♂・♀	
11			♂・♀		41			♂・♀	
12			♂・♀		42			♂・♀	
13			♂・♀		43			♂・♀	
14			♂・♀		44			♂・♀	
15			♂・♀		45			♂・♀	
16			♂・♀		46			♂・♀	
17			♂・♀		47			♂・♀	
18			♂・♀		48			♂・♀	
19			♂・♀		49			♂・♀	
20			♂・♀		50			♂・♀	
21			♂・♀		51			♂・♀	
22			♂・♀		52			♂・♀	
23			♂・♀		53			♂・♀	
24			♂・♀		54			♂・♀	
25			♂・♀		55			♂・♀	
26			♂・♀		56			♂・♀	
27			♂・♀		57			♂・♀	
28			♂・♀		58			♂・♀	
29			♂・♀		59			♂・♀	
30			♂・♀		60			♂・♀	

【イカについて】

スルメイカ (*Todarodes pacificus Steenstrup*) は、英名 Japanese flying squid で、日本周辺に広く分布し、南は東シナ海、北は沿海州、サハリン西岸の日本海オホーツク海西部、東は東経 170 度までの北太平洋に及ぶ。北海道地方では「マイカ」と呼ばれることがある。ご存知 **函館の魚**！

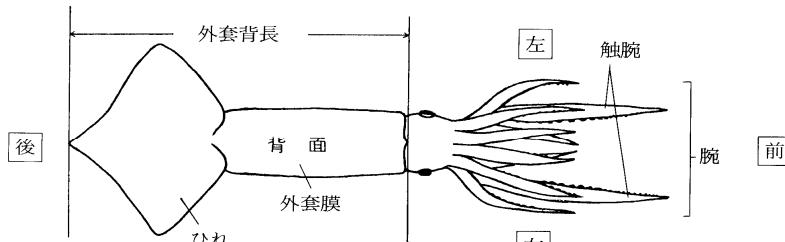


スルメイカは、日本周辺に広く分布し、南は東シナ海、北は沿海州、サハリン西岸の日本海、オホーツク海西部、東は東経 170 度までの北太平洋に及ぶ。

生まれた時期により、秋生まれ群、冬生まれ群、夏生まれ群の 3 系群があると考えられている。北海道周辺に分布し資源量が多いのは、冬生まれ群(九州南西岸から東シナ海で 12~3 月頃に生まれる)と秋生まれ群(九州西岸から日本海西部沿岸で 9~11 月に生まれる)である。外套膜はほぼ円筒形で中央部がやや膨らむ。腕(足)は外套長の半分くらいで 2 列の吸盤がある。イカ類では腕のある方が前、ひれ(耳)のある方が後であり、また、漏斗のある方が腹側、その逆が背側である。

日本海海域のスルメイカの月齢と魚体大きさの関係は概ね以下のようである。

月齢(ヶ月)	外套長(cm)	体重(g)
6	15	60
8	21	179
10	24	276
12	24	276



スルメイカの外套背長測定部位(日水研, 1972 より引用一部改変)

スルメイカは生まれた時期の違いから、秋生まれ群、冬生まれ群、夏生まれ群の系群があるが生まられてから死亡するまで、お互いに独立した集団であるかは良く分かっていない。北海道周辺で資源量が多い群は、冬生まれ群と秋生まれ群である。冬生まれ群は、九州南西岸から東シナ海で 12~3 月頃に生まれ、稚仔が太平洋側で黒潮、日本海側では対馬暖流にのって北方海域へ漂流しながら索餌のため移動する。早いものでは 5 月頃北海道南部に現れる。8 月の分布は最も北側になり、9 月頃の水温低下にともなって南下回遊に転じ、12~3 月に産卵して一生を終える。したがって、寿命は 1 年である。秋生まれ群は 9~11 月頃に九州西岸から日本海西部沿岸で生まれ、稚仔は対馬暖流に運ばれて日本海を北上するが、太平洋側にはほとんど分布しない。8 月には利尻・礼文島を越え、モネロン島付近に達し、8~9 月頃に南下回遊を始める。北海道南部では、この回遊時期にあわせて 6 月 1 日から 1 月までが漁期となっている。5 月は魚体が小さいので禁漁とし、1 月は資源量が少ないので、出漁する漁船は極めて少ない。北海道南部では、北上においては成長期にあり、南下では産卵を控えて成熟期に入っている。

イカは裏側に漏斗(ろうと)と呼ばれる小さな管があり、外套膜を広げて外套腔から吸引した海水を、外套膜を収縮することによって漏斗から噴射する。イカの推進力は水ジェット推進であり、漏斗は 360 度自由自在に向きを変えることができる。最も早い動きは後ろ向きに進むときである。これは敵からの逃避する方向である。イカ類の視覚は良く発達した眼神経節を持ち、優れた感覚器官となっている。

6. 6 イカの鮮度調査実習

1) 目的

函館沿岸で採取できる新鮮なイカと冷凍されたイカの鮮度を観察するとともに、その食感や味を比較し鮮度保持の重要性について考える。

2) 材料

- ・ 冷凍イカ(前航海で獲ったもの、あるいはスーパー等で購入)2尾/直
- ・ 新鮮なイカ 2尾/直
- ・ 顕微鏡 1,2 台/班
- ・ はさみ、包丁 各1本ずつ/直
- ・ 透過測定紙 1枚/直(別紙使用)
- ・ ランプ

3) 方法

(1)新鮮なイカと冷凍イカのそれぞれから、3cm 角の断片(できれば腹側から採取)をはさみで切り取り、肉眼および顕微鏡下で観察する。→新鮮なイカは色素胞が動くのに対して、冷凍イカではその動きが見られない。顕微鏡下で見るとより不思議な動きが観察しスケッチする。(現在、イカの鮮度判定において色素胞が動くことが重要な判定指標になっている。



図 6.1 捕獲直後のイカの写真



図 6.2 イカ表皮の色素胞の様子

- (2)実験で残った部分の皮をはいだ後、透過測定用紙の上においてその透過度を観察する。どの点まで観察が可能か判断する。→新鮮なイカは透明で紙に印刷した点をある程度確認できるのに対し、冷凍イカではその透過度が低いことを観察する。
(3)残りの1尾の皮をはぎ、細く切って試食し、食感と味を確かめる。→新鮮なイカには歯ごたえと若干のあまみがあることを体感してもらう。(寄生虫のアニサキスについてないか否かについては注意が必要。)

4) レポートの作成方法

新鮮なイカと冷凍イカの色素法の様子をスケッチし、その動きの違いを説明する。また、新鮮なイカと冷凍イカの筋肉の透明度を比較するため確認できた色の番号を示し、その違いを述べる。味、食感の違いについて説明し、観察した色素法の動きや透過性との関連性について考察する。

7. レポートの作成と提出

1) 各実習のレポートの作成

レポートは全実習項目について直ごとにまとめ、4日目の午前 8:20 までにまとめて担当教員に提出する。

2) 個人レポート(感想文他)

全員、実習全般にわたる感想を書くA4 1枚(800字程度)。4日目の個人レポート作成終了後に提出する。

【付録】

基礎乗船実習の詳細スケジュール

- 各直は5分前に下記の服装で学生食堂に集合する
- | | |
|--------|--|
| 船外の実習: | (イカ釣り) ライフジャケット・長靴・カッパ・ヘルメット
(CTD, プランクトン) ライフジャケット・長靴・ヘルメット
(ロープワーク) ライフジャケット・短靴・帽子 |
| 船内の実習: | (操船・気象・目視) 短靴・帽子 |

H21年度基礎乗船実習の詳細スケジュール(1/4)

1日目	1直	2直	3直	4直	5直	6直	7直	8直
11:00	高等教育開発センター玄関集合							
11:30	バス(札幌→室蘭) 60人乗り観光バスを手配							
	地球岬経由							
14:00	室蘭港到着							
14:15	乗船							
	班長の選任(印鑑・帽子代の徴収→帽子・テキストに名前記入)							
	居室の確認と荷物の移動							
	学生食堂→船尾甲板							
14:40	対面式(船尾甲板にて開始。帽子・名札・必携)							
	船内見学(C/O, 1/O, 2/O, J2/O)							
	船内生活と安全注意(C/O)							
15:40	室蘭出港							
	出港見学(W.Dk, 左舷PoopDk)							
16:10	食当の説明						16:30 配膳準備	
17:00	夕食						食器洗い・片づけ	
	居室整理、ベッド作り							
18:20	全体実習内容の説明(芳村)							
19:00	イカ釣り説明(2/O)							
19:30	イカ釣り(希望者)							
20:30						イカ釣り(希望者)		
22:00 ~23:00 女子専用の風呂時間								
23:00 就寝								

2日目	1直	2直	3直	4直	5直	6直	7直	8直
6:30	起床							
6:45	ウォッシュデッキ				トイレ・風呂掃除(各直2名)	7:00 配膳準備		
7:30	朝食					食器洗い・片づけ		
8:30	実習説明(プランクトン・目視観測)					9:20		
9:00	操船・気象観測	目視観測	9:30	9:30	ロープワーク	ロープワーク	プランクトン	プランクトン
	目視観測	操船・気象観測	CTD	CTD				
11:30	昼食					11:00 配膳準備		
12:20	12:50	12:50	12:50	12:40	食器洗い・片づけ	12:20	操船・気象観測	目視観測
	CTD	CTD	ロープワーク	ロープワーク			目視観測	操船・気象観測
14:30	15:00	15:00	14:50	14:30	14:30	15:00	CTD	CTD
	ロープワーク	ロープワーク	プランクトン	プランクトン	操船・気象観測	目視観測		
					目視観測	操船・気象観測		
17:00	夕食			16:30 配膳準備				
18:30	実習説明(イカ鮮度調)							
19:00	イカ釣り				イカ鮮度調査			
20:15	イカ鮮度調査				イカ釣り			
22:00 ~23:00 女子専用の風呂時間								
23:00 就寝								

3日目	1直	2直	3直	4直	5直	6直	7直	8直
6:30 起床								
6:45 トイレ・風呂掃除(各直2名)			7:00 配膳準備				ウオッシュデッキ	
7:30 朝食								
8:10 ブランクトン	8:30 ブランクトン	8:10 目視観測	8:50	8:40 CTD	8:40 CTD	ロープワーク	ロープワーク	
			目視観測					
10:30 入港見学	(11:00 函館入港予)	11:00 配膳準備						
11:30 昼食			食器洗い・片づけ					
12:30 下船集合(学生食堂)貴重品・帽子・名札必携								
12:40 路線バスにて函館キャンパスへ移動								
12:55 学部長挨拶								
13:00 函館キャンパス見学								
15:40 路線バスにておしょろ丸へ移動								
16:00 函館市内自由行動における諸注意								
16:15 函館市内自由行動(原則直単位で行動すること。夕食は各自)								
21:00 乗船・点呼								
21:10 各直レポート作成(筆記用具、テキスト、電卓)								
22:00 ~23:00 女子専用の風呂時間								
23:00 就寝								

4日目	1直	2直	3直	4直	5直	6直	7直	8直
(6:00 函館出港予定)								
6:30 起床								
6:45 (全員 食堂に集合)	7:00 配膳準備							
7:30 朝食								
	食器洗い・片づけ							
8:20 各直レポートの提出		8:30 操船	8:30 気象観測					その他の直は機関室の見学(希望者)
各室整理清掃								
		気象観測	操船					
10:00 各室の最終清掃	大清掃							風呂・トイレ・洗面所の清掃(男子:各直2名、女子:各直1名)
	11:00 配膳準備							通路・階段の清掃
11:30 昼食								
	食器洗い・片づけ							
12:40 個人レポートの作成(全員 食堂に集合(名札の回収・印鑑の返却))								(13:30室蘭入港予定)
13:40 各室の点検								
13:50 各自の荷物を前デッキに移動								
14:00 修了式(学生食堂に集合にて終了式)								
14:05 下船								
14:15 バス(室蘭→札幌) 60人乗り観光バスを手配								
16:30 高等教育機能開発センター玄関前到着								
16:40 解散								

担当教員

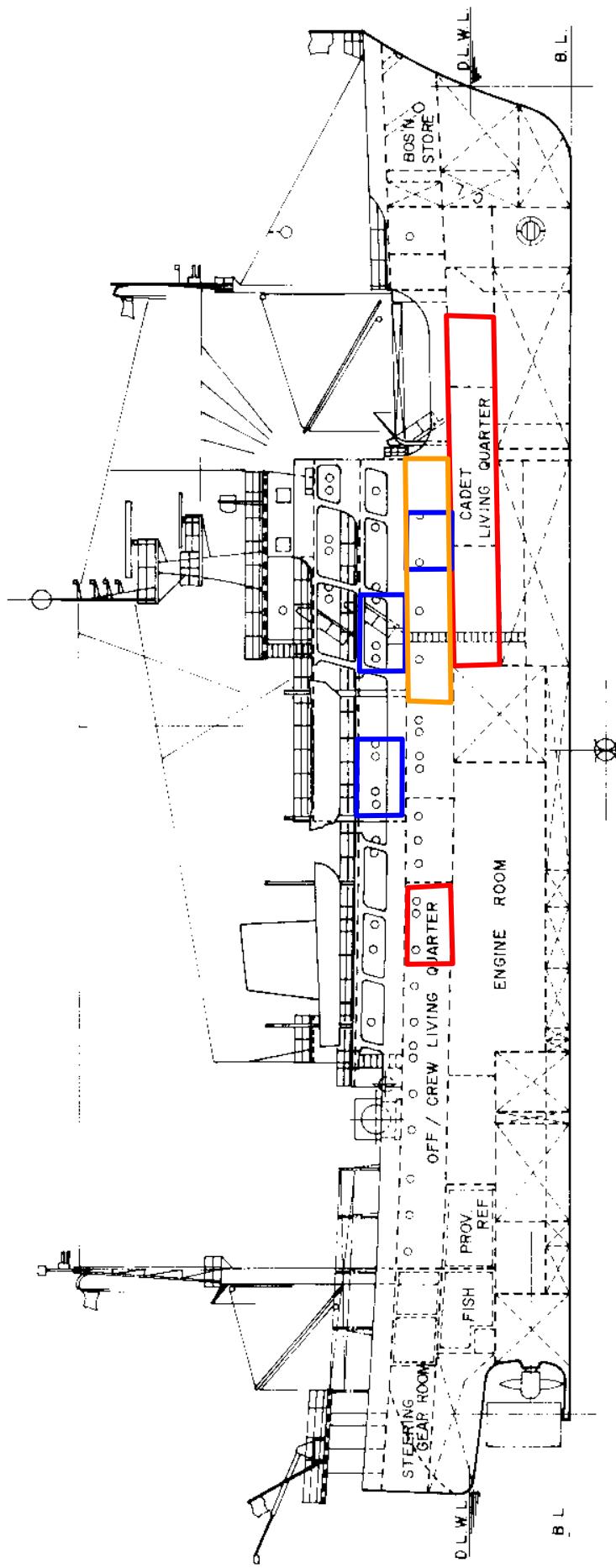
氏名	所属	専門分野	部屋
	芳村 康男 教授	海洋産業科学分野 (水産海洋工学)	漁船・調査船の設計、船の推進性能・運動性能・操縦制御、漁業機器・資源観測機器、海中ロボットなどに関する研究 CS
	今井 一郎 教授	海洋生物学分野 (浮遊生物学)	プランクトン生理生態学・有害有毒微細藻類学・生物海洋学・環境修復生態学などに関する研究 S(C)
	細川 雅史 准教授	生物資源化学分野 (機能性物質化学)	生活習慣病予防、高度不飽和脂肪酸、リン脂質、カロテノイド、ペプチド、細胞分化誘導に関する研究 S(B)
	松石 隆 准教授 <44組担任>	資源生物学分野 (資源解析学)	資源管理方策の妥当性、洞爺湖ヒメマスの資源管理の研究、価格を考慮した資源管理方策、クロミンククジラの個体数推定法の研究 S(A)
	向井 徹 准教授 <45組担任>	資源計測学分野 (音響資源計測学)	音響計測による魚群分布の季節変化、魚群の移動と海洋構造、魚群の遊泳行動の解析、各種魚種のターゲットストレングスの研究 S(A)
	水田 浩之 准教授 <46組担任>	育種生物学分野 (海洋生物遺伝資源学)	コンブ目植物の胞子体成熟メカニズム解明、アマノリ類における単胞子形成誘導、コンブ類の組織培養技術の改良などの研究 S(A)
	岸村 栄毅 准教授 <47組担任>	生物資源利用学分野(食品機能化学)	ヒトデ類のホスピリパーゼ A2 の特性、タンパク質分解酵素の特性の解明と応用、海産生物の酵素阻害剤の特性解明と応用の研究 S(A)

TA(ティーチングアシスタント: 大学院生)

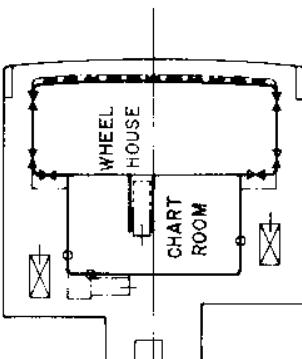
高尾信太郎	衛星資源計測学	M2	J
大西 由花	浮遊生物学	M1	SpS(C)
渡辺 千種	資源生物学	M1	SpS(C)
佐々木直也	機能性物質化学	M1	J
香川奈緒子	衛星資源計測学	M1	J
本間 智恵	浮遊生物学	M1	J
栗原 縁	資源生物学	M1	J
鈴木 雄太	機能性物質化学	M1	S(C)
山本 裕也	水産海洋工学	M1	S(C)
他 全 10 名			(各航海5名乗船)

おしょろ丸教員・乗組員

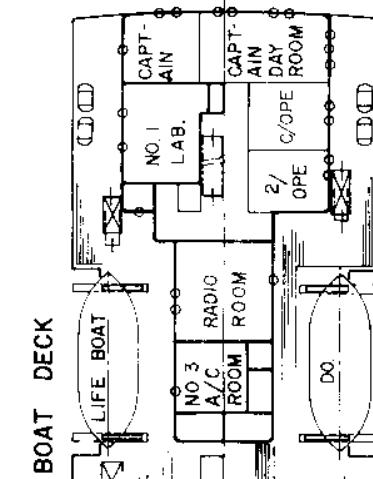
氏名	役職	専門分野	部屋
	高木 省吾 准教授	船 長	nekton, XCP, 海洋調査, 調査 船, 洋上教育
	亀井 佳彦 助教	首席一等航海士	航海・運用学・海洋観測技術・海 洋生物採集技術
	坂岡 桂一郎 助教	次席一等航海士	シーマンシップ・海洋観測機器・ 航海術
	星 直樹	二等航海士	2/O
	阿部 拓三	三等航海士	3/O
	木村 順一 助教	機 関 長	水産学一般, 船舶工学, 船用機 関, 漁業機械
	藤本 文雄	一等機関士	
	沢中 和也	主席二等機関士	
	志村 順平	次席二等機関士	
	上條 明雄	通 信 長	
	石垣 聰	二等通信士	
	松井 良春	甲 板 長	
	四十栄敏晴	甲板次長	
	砂子間 宣	操 舵 手	
	小野寺喜浩	"	
	江田 直行	"	
	三島 正士	"	
	佐々木大輔	甲板員	
	荻原 翔太	"	
	小松 峻平	"	
	長谷川秀一	操 機 長	
	中村 幸也	操 機 次 長	
	高野 拓也	操 機 手	
	村上 亨	"	
	新藤 圭介	機 関 員	
	荒川 隆亮	"	
	澤田 佳徳	司 廚 長	
	池田 和広	司厨次長	
	石川 一生	司 廚 手	
	中村 博	"	



NAVIGATION BRIDGE DECK



BOAT DECK



GALLOWS COMPANION TOP

